

小学校の歌唱指導で活かせる簡易伴奏法の研究－ I

～鍵盤和声の基礎的な技能で出来ること～

成川ひとみ

A Study on a Simple Piano Accompaniment for the Instruction of Singing at Elementary School

NARUKAWA Hitomi

(Received January 6, 2016)

キーワード：小学校、音楽、歌唱伴奏、簡易伴奏法

はじめに

平成21年度に始まった教員免許更新講習で、筆者はこれまでに選択科目として3回、音楽の実技系技能のスキルアップを目標に歌唱指導の簡易伴奏法をテーマとした講習を行った。そして、学校現場で日々指導にあたっておられる先生方のピアノ（技能）力の現実や「お悩み」の実態にふれ、可能な限り簡潔にポイントを絞り込んだ簡易伴奏法を提案する必要性を強く感じた。

今回の研究では、ピアノの熟練度が低くても実行可能な簡易伴奏、また練習に費やす時間が少なくても実行できる簡易伴奏法を提案したいと考えている。

1. 「簡易伴奏」と「鍵盤和声」

論を進めて行く前に、まずは題目にある「簡易伴奏（法）」と「鍵盤和声」について、筆者の認識を述べておきたい。

1-1 「簡易伴奏」とは

歌曲等「旋律」によって構成される楽曲は多くの場合、作曲家本人または編曲者が作成した、一般に「伴奏」と呼ばれる「機能と声（ハーモニー）」によって構成される音群を伴って演奏される。作曲者のオリジナルによる「伴奏」に対して、主に即興的に、旋律に対する音の「背景」を付加させる技能を「簡易伴奏法」と呼ぶことが多い。今、「音の『背景』」との言葉を用いたが、そもそも西洋音楽は「機能と声」と呼ばれる響きの背景を伴って旋律が展開する性質を持つ音楽形態である。正式な楽譜として書かれている「伴奏」であっても、この「機能と声を伴う形態」を原則とする特質は変わらない。演奏の効果をより高める為に、音群を多様化させてあるが、和声進行が根源にあることには変わらない。更に、たとえ旋律楽器が単独で演奏する「無伴奏」と呼ばれる形態の楽曲であっても、和声感は存在する。ゆえに、和声進行の情報が的確に把握されていれば、旋律に添えられる背景としての伴奏は、たとえ音の数が簡素化されていても、立派にその役割を果たす事ができる。

「機能と声（和声）」については、「和声学」と呼ばれる分野が存在するほどに奥が深く、作曲家のみならず、演奏家を始め何らかの形で西洋音楽を専門とする者であれば、程度の差こそあれ、必ず学ばねばならない学問であるが、本論文では、可能な限り「一般的な和音の知識」に準じて、論を展開して行きたいと考えている。

1-2 「鍵盤和声」とは

作曲家のオリジナル伴奏から離れて、演奏者が鍵盤楽器を用いて、旋律に合う機能と声を演奏する技能を

「鍵盤和声（キーボードハーモニー）」と呼ぶことが多い。また、この技能は即興的な演奏の場面で、より生かされる技能でもある。

本論文では、和声の必要最低限の知識を用い、鍵盤和声の極めて初歩的な技能と必要最低限のトレーニング（練習）で実行可能な、簡易伴奏法の提案を目指す。

2. バス音による単音を使った簡易伴奏

譜例 1

（小学校3年生共通教材） 「春の小川」 文部省唱歌 /作詞 高野辰之 /作曲 岡野貞一

は ー る の お が わ は さ ら さ ら い く よ

き ー し の す み れ や れ ん げ の は な に

す ー が た や さ し く い ろ う つ く し く

さ ー け よ さ け よ と さ さ や き な が ら

歌唱曲の楽譜では便宜上、上記のようにアルファベット表記によるコードネームが書き添えられていることが多い。この場合、右手で旋律を弾きながら、コードネームの英語音名をバス音として、バス音のみを左手（の指1本）で弾き添えるだけで、最もシンプルな歌唱伴奏が成立する。例えば、子どもたちが新しい歌を学ぶ第1回目の指導では、旋律の音が鮮明に聞こえるので、非常に有効な簡易伴奏である。

2-1 音の長さの変化による表現手段

英語音名の、Cをド、Fをファ、Gをソ、と楽譜に書かれたポイントのみで発音する方法もあるが（◇）、一定のペースを持って演奏するとリズム感が生まれ、リズム感の種類によっては曲想に変化が生じる。「春

の小川」の場合、四分音符のペースで発音すると「忙しい」感じになり、二分音符での演奏が春らしい情感に合うと思われる。また全音符では、和声の変化と合致しない場面が多くなり、一定の拍感が出難くなる。しかし、旋律の特徴の解釈によっては、3種類の音符（全音符、二分音符、四分音符）を使い分けると、単純なバスのロングトーンだけでも、味わいを出す事ができる。

2-2 「高・低」の変化による表現手段

「高い」音は、「軽さ」や「高揚感」を表わすことがあり、「低い」音は、「安定感」「深さ」「沈んだ感じ」等を表わすことがある。この特徴を使って、旋律のエピソード感を子どもたちに、言葉を使わずに純粹に音から感じ取らせることも可能であろう。例えば、曲の構成「A-A'-B-A'」のBにあたる第9小節のソから低音域を使う事で、場面の変化を表出する事ができる。

また冒頭の第1～4小節においても、後半2小節のバス音を上げるか下げるかで、音楽の感じを変える事ができる。（譜例2，参照）

譜例2

は - る の お が わ は さ ら さ ら い く よ

2-3 音程の変化：コードの他の構成音も使った表現手段

音が次へ移るとき、なだらかに移動する「順次進行」と「跳躍進行」する場合とでは、当然のことながら音表現の情感に違いが出る。冒頭の4小節を例に試行してみよう。

譜例3

は - る の お が わ は さ ら さ ら い く よ

譜例4

は - る の お が わ は さ ら さ ら い く よ

譜例3では、「春の『小川』」は楽しく元気に流れる感じ、春の日差しも暖かく、小川に入って水遊びをしたくなる雰囲気を感じられるようである。譜例4では、雪解けの始まった早春の頃、冬の張りつめた空気と異なる微かな柔らかさを感じながら、静かに流れる小川を岸辺で見ている感じが表出されているように思える。

2-4 コードを自由に選択する

コードについては主に3章で論じるが、ここでは単音で演奏する場合について触れる。

例えば、ト音（ソの音）は、G（G major）のバス音（主音、第1音）であると同時に、C（C major）の第5音でもある。第12小節について、譜例1では第11小節のFからCに直接移っているが、一度Gを選択した後で、3拍目からCへ行くことも可能である。カデンツの作り方としては、譜例1の「F→C」よりも「F→G→C」の方がバランスが良く感じられる。然し乍ら「F→C」が醸し出す情緒感も、表現の味わいとしては面白い。

2-5 まとめ

以上、バス音のみを使った簡易伴奏について、4つの観点から多様化の可能性を述べた。譜例5は筆者の試作である。冒頭の譜例1の「◇」、及び二分音符で演奏する場合と、是非比較して見ていただきたい。

譜例5

（小学校3年生共通教材） 「春の小川」 文部省唱歌 /作詞 高野辰之 /作曲 岡野貞一

はーるのおがわはさらさらいくよ

きーしのすみれやれんげのはなに

すーがたやさしくいろうつくしく

さーけよさけよとささやきながら

3. 基本のカデンツによる和音を使った簡易伴奏

「和音」とは2つ以上の音を重ねて発音する音のことであるから、自由な組み合わせを含めれば数に限りはない。定型的なものとしても、長調の響きのする「長和音」と短調の響きのする「短和音」、「協和音」と「不協和音」等、西洋音楽でごく「普通に」使われるものでも種類は相当多い。

しかし、ここで取り上げるのは、1章で述べた「背景」を表出する和音進行の中でも、最もシンプルな「カデンツ」と呼ばれるパターンを構成する「I」「IV」「V」の3種類の和音である。今「最もシンプルな音の背景を構成するパターン」と述べたが、小学校共通教材の調性音階による作品は全て、この「最もシンプルなパターン」の3種類の和音によるカデンツで伴奏することが可能である。

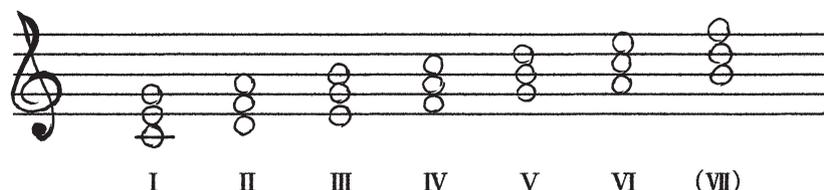
勿論、個人的な嗜好次第で多様な和音を混ぜ込むこともできるが、本論文では「基礎・基本」となる3種類の和音のみを使用して表現の可能性を追求したい。なお、小学校学習指導要領解説音楽編でも、I、IV、Vの3種類を使用することが指示されている。

3-1 和音記号について

「I」「IV」「V」は和音記号である。2章で使用したコードネーム「C」「F」「G」も言わば和音記号であるが、記号の「名前」の根拠が異なる系に所以しているため、一般的に「和音記号」「コードネーム」と呼び分けて区別する。この2種類は、場面に応じて使い分けると便利なので、根拠と特性を理解しておくことが望ましい。

まず「和音記号」であるが、調を構成する7つの音のそれぞれに、3度間隔で3つの音を重ねる「三和音」と呼ばれるもので成り立っている。まず、ハ長調の例をあげる。

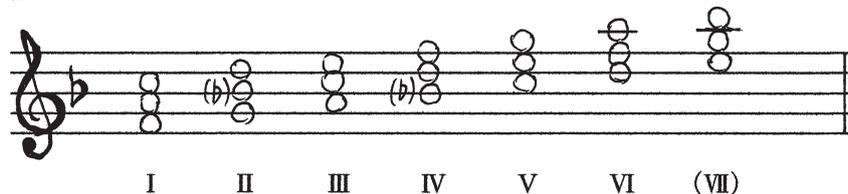
譜例6



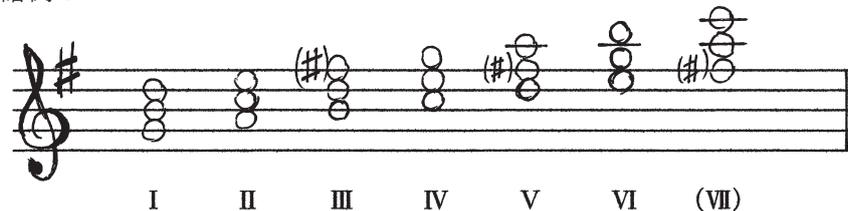
そして、1オクターブの間には12個の音が存在するので、当然のことながら12の音それぞれに音階（長調）があり、12の長調全てで譜例6と同様の和音が出る。

譜例7としてヘ長調を、譜例8としてト長調を示す。

譜例7



譜例8



ローマ数字の記号は、12の調全てに共通である。つまり、記号のローマ数字は、音階の何番目の音であるかを示している。そして音階の7つの音はそれぞれ、番号以外にも名称を持っている。

音楽の流れの中でエピソード作りの要となる、特に場面を感じさせる音がある。その様な音の呼称は記憶しておきたい。まず、調性音楽（機能 and 声による西洋音楽の形態）で音楽の流れの帰着点を示す和音がある。「帰着」を感じた時は、その和音が鳴っている時である。その和音とはIの「主音」上に作られた和音で、「主和音」と呼ばれる。もしも楽曲が主和音以外の和音で終わると、実際は「終わった」感じがしない。途中で断ち切られたような感覚を覚える。

次に、主和音の帰着感を確実化する響きがある。主和音が鳴っている場面の全てで帰着を感じるとは言えない。例えば2章で取り上げた「春の小川」でも、ハ長調の主和音は終結場面以外でも、実際は全16小節の

うちの10小節半分の背景で鳴っている。主和音の前に存在して帰着感を確実化する和音とは、Vの「属音」の上に作られた「属和音」である。

このIとVが、カデンツの最もシンプルな形である。ちなみに「ちょうちょ」や「かっこう」「ぶんぶんぶん」は、この2つの和音だけによる伴奏が可能である。

しかし、この2つの和音による「響きの背景」は、確かに単純な往復運動のようである。ここにもう一つ、IVの「下屬音」の上の「下屬和音」が加わると背景作りは盤石となる。Iから始まり、IV→V→Iと終結するカデンツは「完全終止」と呼ばれ、音楽の流れの中では、文章に例えれば「。」の存在を感じさせる。

3-2 コードネームについて

例えば、ハ長調のIの構成音は「ド・ミ・ソ」であるが、ト長調のIVでもあり、またヘ長調のVでもある譜例6～8を参照していただきたい。この様に和音記号が調性感に基づく和音の呼び名であるのに対して、コードネームは絶対音的に1種類の和音のみを示す。「C」の記号で示された「C major」と呼ばれる和音は常に「ド・ミ・ソ」であり調性は関与しないので、実際に「どの鍵盤を押せば良いのか」は判り易い。

しかし、伴奏が和音で「響きの背景」を作り「エピソード」を構成するのが目的であるのなら、カデンツの意識無く和音を発音するのは、演奏表現として不十分と言えよう。

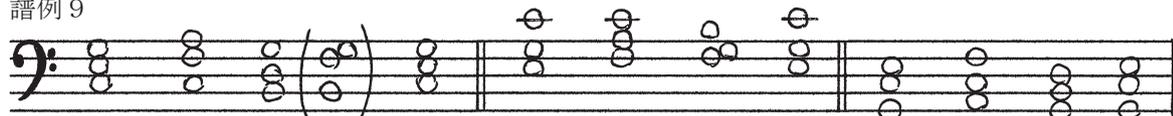
そこで、鍵盤で弾く和音のカデンツのパターンを反復練習して、「手の感覚」を身につけてしまうことを奨めたい。

3-3 カデンツを弾く～和音のつなげかた

完全終止のカデンツは「I→IV→V→I」であるが、実際に弾く時は、譜例6からの形では無く、譜例9の様に変化させて使用する。つまり、譜例6の和音は全て基本形であるが、実際に伴奏として使う際は、そのフレーズの表現を考えて、和音を転回して用いる。これは1-2でもふれたが、音楽では音の「高・低」が表現に大きく影響するからである。基本形のままで並べると、意図の感じられない散漫な表現になるし、実際に鍵盤の場所が不必要に移動して、非常に演奏し難い。

そこで、3種類のI：基本形、第一転回形、第二転回形、それぞれを開始音とするカデンツのパターンを繰り返し練習して、体の感覚にしてしまうのが良い。

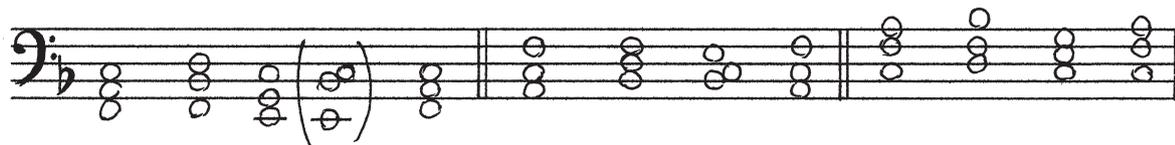
譜例9



I → IV → V (V7) → I I → IV → V7 → I I → IV → V → I
 (基本形) (第一転回形) (第二転回形)

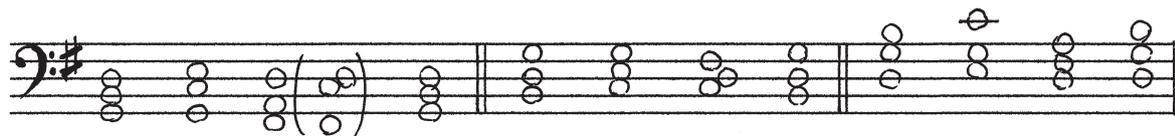
そして、万全を期するのであれば、共通教材で扱われている他の調も練習しておくことをお奨めする。

譜例10：ヘ長調 - 「日のまる」「もみじ」「こいのぼり」「冬げしき」「ふるさと」



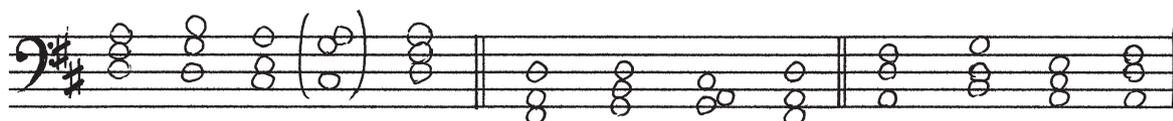
I → IV → V (V7) → I I → IV → V7 → I I → IV → V → I
 (基本形) (第一転回形) (第二転回形)

譜例11：ト長調 - 「うみ」「茶つみ」「スキーの歌」



I → IV → V (V7) → I I → IV → V7 → I I → IV → V → I
 (基本形) (第一転回形) (第二転回形)

譜例12：ニ長調 - 「われは海の子」



I → IV → V (V7) → I I → IV → V7 → I I → IV → V → I
 (基本形) (第一転回形) (第二転回形)

3-4 具体例

2-3で習得した基本のカデンツを使った「春の小川」の具体例を、譜例13としてあげる。

譜例13

は - る の お が わ は さ ら さ ら い く よ
 き - し の す み れ や れ ん げ の は な に
 す - が た や さ し く い ろ う つ く し く
 さ - け よ さ け よ と さ さ や き な が ら

譜例13では第9小節から第12小節の音域を低くしたが、逆に高く設定した場合は別の味わいが生まれる。

譜例14

また1-4でもふれたが、楽譜に付されたコードネームにしばられない和音付けも可能である。その際、カデンツの和音進行を習得しておくことで、自然で的確な実行が可能となるであろう。例として譜例15をあげる。

譜例15

(小学校3年生共通教材) 「春の小川」 文部省唱歌 / 作詞 高野辰之 / 作曲 岡野貞一

3-5 まとめ

簡易伴奏を実行するのに必要な音楽の知識とピアノ演奏技能の目安を、下記の3点に整理した。

- 1) 右手で旋律が弾けること
- 2) 「調性」「基本の三和音：I、IV、V」「その転回型」、以上の3つについて理解していること
- 3) 左手で和音を次々に弾いて、カデンツのパターンを自然に演奏できること

2) の知識については、小学校学習指導要領解説音楽編で指導が指示されている部分も多い。3) の習熟が、最大の難関かもしれない。

しかし、3) の技能を習得すれば、次の段階として和音を分散化つまり分散和音に変化させることができる。分散和音を使えば様々なリズムで演奏して多様な背景を表現することができる。そうすれば簡易伴奏であっても、本格伴奏に劣らない表現力を持つ伴奏に近づくことができる。

譜例16は、譜例15から応用させた伴奏である。

譜例16

(小学校3年生共通教材) 「春の小川」 文部省唱歌 / 作詞 高野辰之 / 作曲 岡野貞一

は ー る の お が わ は さ ら さ ら い く よ

き ー し の す み れ や れ ん げ の は な に

す ー が た や さ し く い ろ う つ く し く

さ ー け よ さ け よ と さ さ や き な が ら

おわりに

本論文で目指したのは「たとえピアノの腕前が拙くても、歌唱指導の伴奏はできる」と現場の先生方に知っていただくことで、更に「それなら、伴奏CDを使わずに、自分で弾いてみようか…」と書いていただけたら、筆者として本望である。

教室の子どもたちの歌唱能力や、その場の雰囲気や習熟のレベルに、先生が臨機応変に合わせて弾く伴奏は、いつも「同じ」で「完璧」なCD伴奏より遥かに意味のあるものだと思う。学部の学生に訊ねると、「CDに『合わせて』歌っていた」と小学生の頃の記憶を答える者も多い。子どもたちを伴奏CDに合わせて「歌わせる」のではなく、指導者が子どもたちと心をつなげる音体験こそ、「表現」活動の真意を伝え、育むことができるのではないかと、思う。

また今回は、一人でも多くの先生に、自分で鍵盤楽器を弾いて「生伴奏」する勇気を持っていただけるように、副題を「鍵盤和声の基礎的な技能で出来ること」とし、必要最少限の音による簡易伴奏を目指したが、題目を「研究Ⅰ」としたのは「研究Ⅱ」への展開を考えてのことである。

3-5で試行例を示したが、分散和音にすることによって、更に上級レベルの簡易伴奏に発展させることができるし、色々な分散和音のリズム型によって生まれる表現の多様性を追求するのは興味深い。また教員免許更新講習の際、受講の先生方からは「『シャレタ』和音を使ってみたい」との要望が根強くあった。基本の和音以外を使ってみたいのだが、実際に使うとカデンツを構成できなくなり、和音の進行が破綻してしまうとのことである。Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ以外の和音も加えて、成立し易く応用性の高い和音進行のパターンを研究するのは有効であると思われる。

次は応用編として、ワンランク上の技能を目指した簡易伴奏法の研究を展開させて行きたいと考えている。

参考文献

有本真紀・阪井恵・山下薫子 編著：「教員養成過程 小学校音楽科教育法」,教育芸術社,2008.

石桁真礼生・末吉保雄・丸田昭三・飯田隆・金光威和雄・飯沼信義 共著：「新装版 楽典 理論と実習」,音楽之友社,1965.

文部科学省：「小学校学習指導要領解説 音楽編」,教育芸術社,平成20年.